

婦人の子供

文學士 下田次郎

婦人の子供と云ふことは通俗に考へれば何でもない、阿母さんは子供を育てるし、他處に行くにも子供を連れて行く、何でもないやうでありませすが併し學問の方から云ふとナカ／＼込み入つた面白い研究の問題です。今日は其の學問の方のことを概略少し御話をして見ようと思ふ。

婦人と子供と云ふものは、身體も精神も大層似た所のあるものです。御承知のやうに子供は頭が大きくて胴が長くて、足と手が短い、さうして皮膚が滑らかで、毛が薄くて、身體が弱い、婦人が其通り、男子から比べると、割に頭が大きくて、胴が長くて、手足が短く、皮膚が滑らかで、毛が薄くて、脂肪に富んで居る。希臘のアリストートル或は近來でも、スペインサーなどは、婦人は發達の止つた者であると云つて居る。所が其反對にさうでは無いアレはアレで完全なもので發達の止つた

もので無いといふを言つて居る學者もある、フランスのフイエーの如きそれである、是は一朝一夕には言へませぬが、婦人は男子から云ふと早く熟するものであることは事實である。婦人は脊丈が十一二歳から急に伸びて來て十四五歳まで伸びるが、それから伸びない、男子はそれより一二年後れて伸びて、後も亦一二年乃至もう少し伸びる、従つて男子が脊が高い、體量も同様であつて脊丈が出來て後に肉が出來るのであるから體重は婦人は十二三歳から始つて十四五歳までの間が増し方が盛である、男子は十三四歳から十六七歳までが盛である、即ち婦人は男子より一二年早く生長を始め早く終る、即ち婦人の身體は子供からの距離が近いと云ふことがある、男子は子供を距ることが婦人よりも遠いのである、併し動物學の方から云ふと、若さを有つて居ると云ふことは宜いことである、老化——年寄と云ふことは退歩である、即ちそこでエリスの如きは子供と云ふものは動物學上よりいへば上等な一層進んだ身體をもつて居るものである、それが大人に成るに従つて

動物化して来る、即ち割に頭が小さく、手足が長くなつて動物のやうな風に退化して来る、人間の中で最進化した形體は子供である、だから子供に近い婦人と云ふものは形體上男子より上等のものであるといふて居る、動物は猿でも生れた當分といふものは、頭が大きくて、胴が長くて、手足が短い、割に人間に似て居る、胎の内では、他の動物と人間との胎兒は一寸區別の付かぬ程似て居る者がある、胎内に宿つて生れるまでといふものは進化の上向きである、生れて後は下つて行くものであると云ふことを唱へて居る、その説に據ると、詰り人間は生れて後は退化して動物的になる猿でも前に申すやうに生れたちは餘程身體の工合が人間に似て居る、それが追々年を取ると頭が小さく、口が尖つて、顔の角度が強くと、手足が長く毛が伸び、皮膚が黒ずんで皺が出来、脂肪が少くなつて、肉が硬はつて来る、是は年寄のしるしである、即ち老化である、猿でも小さい時には上等の動物的の身體を有つて居るが年を取るに従つて下等の者に下がる、又牡の猿は、子猿と牡の猿と

の中間である、人間は生長しても猿の如く退化しないが、やはり子供から見ると退化して居る、婦人は男子と子供との中頃に止つて身体上優勝の位置を占めて居る、以上は今日エリス其他の學者の通説である、果してさうか、どうかと云ふことは議論の出来る事であるが、今日は唯さう言ふ説がある、婦人は形體上男子よりも上等のものであると云ふ説のあると云ふことを御紹介するに止めておく。

希臘人は常に子供なりと言はれて居た、希臘人は年を取つても何時までも若さを保つて居ると云ふことで、即ち其人種は上等なりといふことである所が人類學上、黄色人種が一番多く若さを保つて居る。

西洋に行くとお前は幾歳かと尋ねるから、此方から試みに幾歳に見えるかと聞くと、私は西洋に居りました時は二十八九歳でありましたが、十七か十八位むだらうと言ふ、一体日本人は若い、黄色人種は一番若い所の身體を保つて居る、黒人、濠太利人は極端な老化的動物的の性質を有つて居る

白人は其の中間に在る、其の點に於て白人は我々  
 黄色人種を羨むべきものである、此の身体の變化  
 は食物が非常に關係する、食物が良いと身体の變  
 異が少い、デ野蠻人の体格の中等なりと云ふのは  
 一は食物によるのである、歐羅巴人の上等である  
 と云ふのもやはり食物による食物と身体の關係は  
 ナカ／＼重大なる意味がある、又下等の動物たと  
 へば蝸斗から蛙の牡が生れるか、牡が生れるかと  
 云ふことを極めるには食物が預つて大に力がある  
 營養がよいと多く牡の蛙が生れる今の東洋の子供  
 は東洋流の生活に加ふるに西洋流の生活をやつて  
 居る、即ち東洋と西洋の合した間の生活をして居  
 る、其の中で、一番東洋と西洋の混り方の激しい  
 のは日本である、ソコデ人種學上或は形態學上日  
 本の子供と云ふものが如何に變化するかと云ふこ  
 とは、今日子供の研究上最も趣味のある、世界  
 の子供の中でも一番趣味のある研究問題であると  
 チャンパーレンと云ふ學者は言つて居りますが、  
 大に注意すべき事だと思ふ日本の子供は研究上唯  
 日本ばかりでない、世界的の意味を有つて居るの

でありませう。  
 それから今までは身体の方でありましたが、次に  
 婦人と子供の精神の方はどうかと云ふと、やはり  
 婦人の心は何時までも若さを有つて居る、子供に  
 近い、婦人は物を直観してさうして具體的に判断  
 をする、又婦人の心の中で色々の觀念が移り代は  
 る、其の移り代りが早い、故に言葉も早い、言葉  
 は觀念の流れを言語に移したのである、子供もや  
 はり其の通り、子供の心は活潑で働きが早い従つ  
 て言語も早い、又婦人は感動性が強い能く笑ひ能  
 く泣く婦人を泣かすことは大したむづかしいこと  
 でない、講談師などは婦人を泣かすことは何でも  
 ないといふて居る、所が子供がやはりよく泣くの  
 で煎餅を貰はれぬと泣く貰ふと笑ふ感情の強い者  
 であつて、贅澤に笑ひもするが泣きもする、婦人  
 は子供程贅澤でないが、男子から見ると贅澤に笑  
 ひもするが泣きもするソコデ婦人の泣くのと、男  
 子の泣くのととは意味が違ふ、言ひ換へれば或る點  
 に於ては値打が違ふ、男子は容易に泣かぬ婦人は  
 一寸悲しい話を聞いても泣く、芝居を見ても泣い

て居る、即ち婦人は男子ならば泣かぬでも済むことにも泣く泣きが安つばい、婦人の神経は男子から見ると薄弱である、病人の神経も薄弱で直ぐ泣く、直ぐ笑ふ、其の點に於て婦人は子供に近い又病人に近しい所がある、ソコで婦人の泣くのは或る意味に於て養生である、稼がにやならぬ男の身泣かぬばならぬ女の身と西洋の詩人は歌ふた、婦人が泣くと云ふことは、それは男子と同じやうに深刻な場合もあるが深くなくて浅い、泣き方が男子よりも餘計ある、子供の深い泣き方でない、浅い泣き方ばかりである、さうしてまた婦人は爆發的である、婦人の心にはダイナマイト、石油の罐が納つて居る、と云ふことを言ひます、全く婦人の心は爆發的である、それだから泣くでも笑くでも一時であつて其の代り後は直ぐ止む、印象―感ずることが瞬時であつて夕立が一しきりあつてすむ、後はさつぱりする、男子は心に創を受け、胸に深くして、さうして何時までも抱いて泣きはせぬが悲んで居る、ソコで文學にしても、哀しみの深刻な文學はやはり男子が作つて居る、

詩でも歌でもさうである。又婦人は想像力が活潑である、或る意味に於て婦人は夢を見て居るやうなもので、子供がやはりさうである、婦人に小説、お伽話が適すると云ふも一は想像力が活潑であるからである、しかし婦人の心の活潑と云ふのは谷川の水が岩に激して、シャーンと云ふて居るやうに割に浅い子供の想像がさうである、男子のは大浪がうつて居るやうに大様で一時の激しい想像は無いが、深い想像を有つて居る、又婦人は輕信し易い、當面の都合、早く適應して直ぐそれを應化すると云ふ力が大である、何か人が言ふと初めは信じないが追々澤山言ひ居ると終には信じて仕舞ふ、教會に行つても何時の間にか信者になると云ふのは理窟よりも算る應化の方に因る場合が多くはないかと思ふ、殖民地とかまた人も行つたことの無いやうな所に行つても婦人はその境遇に慣れる、男子は中々慣れぬ又言葉でも婦人は直ぐ覺える、婦人は會話が上手である、男子は逆も女子のやうに出來ぬ、子供がやはり其の通り、極く移り變りが早い、又其の舞

裏面に早く適應する、又婦人は意志が弱いといはれて居る婦人は願ふものだが行ふもので無い、衣物は欲しい、三越なり白木屋なりに行くとなが立つて居る、皆衣服を願ふ人である、如何にして願ひを叶へるかと言ふことはしないで、唯願ふ、子供でもやはりさうである、おもちやが欲しい、それを實行すると云ふことは他に委ねて、人からして貰ふやうな考で唯願ふ、尤も今日此處に御出での方々は願はれれば實行するだけの實力を有つて居られるから普通の婦人と同じことでは無いが大多數の婦人は願ふ者である、なほ精しく云へば色々あります、これだけで子供と婦人は似寄りが多い、といふことの一斑が分る、そこで婦人は子供殊に小さい子供を取扱ひ又教へるに適應、婦人と子供は心の調子が合ふて居る、身体が似て居ると云ふことは裏面に心が似て居ると云ふことになる、そこで幼稚園の保姆はことに婦人に適任である、婦人は先天的保姆である、小學校の教員にもやはり婦人が適する是が詰り今日御話をする要旨である、なほ終りに一言別の事をいひます

極く下等の動物は子孫を造るのに雌雄と云ふ別のものを要せない、細胞が分裂して二つの生物になる、それから接合により子孫が出来最後に男性が現はれて来る、即ち元來動物は女性が初めて男性は後に出来たものである、生物の初めには男性は無い、蟻でも雄の蟻はほんの愛情、用をするだけの事である、雄の蟻は生殖作用が濟むと喰ひ殺されて仕舞ふ、下等の動物の雄は實に意氣地が無いものである、女性の爲に酷い目に遭ふ、鳥になると男性の方が大きくなり、冠を以て飾つたり、羽を以て飾つたりしてをる、獅子で言へば鬣を有て居る、追々男性の勢力が強大で著しくなつて来る人間になると、通例男尊女卑であるが、下等の動物は女尊男卑である、何う云ふ加減でそれが引續り返つて来たか、男女の性質はどうして今日のやうな工合になつて来たか、それを研究することは面白く又有益な事である、日本で言へば、日本の婦人は封建時代更に遡つては王朝時代の様々の教への結果で出来た、人爲の産物である、何處までが天然の婦人で、何處までが人爲の婦人であるか

今日の婦人の心は如何にしてそんなになつたか、婦人は何處まで働けるものか、意志はどうか、感情はどうか、と云ふことを調べることは根本の研究問題である、さうなると自然淘汰性とか色々の八釜しいことになつて来る、其の議論は學者によつて様々で、一定せぬ、併しながら兎に角男女と云ふものは根本的に研究しなければならぬ、唯表面のみを覗て居るのでは本統の根據にはならぬ、今後の研究には男女の根本的研究が必要である

子供は子供で又別に發生學の方から研究すると云ふと非常に面白い、子供と婦人の身体と精神の變化性質を調るべは一の大事業である、婦人と子供に付て書いた十分纏つた本は無いが、色々の本には散見して居る、これを大成せねばならぬ、婦人と子供の比較的研究は學問上甚だ面白いことであるし、又一方男女の研究と云ふことも、學問上頗る興味のある仕事であると云ふことを附け加へて今日は是で御免を蒙ります。

## 英國に於ける兒童虐待防止會

文學士 吉田熊次君演說

此前に下田君の面白い御話がありまして其際私が出まして、もつと面白い御話でも致すと云ふやうな御披露を辱ふしたのであります、實はさう云ふことは誠に不向きなのでありますから御断り申します。

私の御話をするのは英國に於ける兒童虐待防止會と云ふ題であります、此の兒童虐待防止會と云ふのは、其の名の示してあるやうに子供をむごく取扱はないと云ふことでありまして、丁度動物虐待防止會と云ふのが日本にもございまして此の會で以て牛や馬や鳥や獸を慘酷に取扱ふことを防ぐの目的として居るやうに、牛や馬の代りに子供を慘酷に取扱ふことを成るべく少くしようと云ふのであります、理屈を考へますと子供は動物よりは確かに尊い者で無ければならぬ、若し動物を虐